

本田財団レポート No.117

# 「日本という方法」

編集工学研究所所長

ISIS 編集学校校長

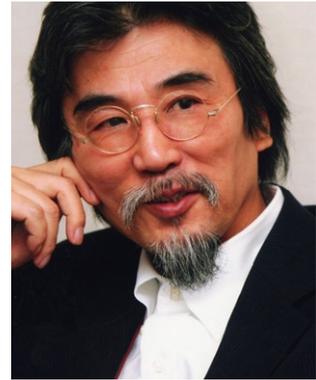
松 岡 正 剛

財団法人 本田財団

## 講師略歴

### 松岡正剛 (まつおか せいこう)

松岡正剛事務所代表取締役  
編集工学研究所所長  
ISIS (イシス) 編集学校校長  
エディトリアル・ディレクター



#### 《略歴》

- 1944年 京都府生まれ
- 1967年 早稲田大学 文学部 仏文科出身
- 1971年 工作舎設立
- 1982年 松岡正剛事務所設立
- 1987年 編集工学研究所設立
- 1997年 東京大学客員教授
- 1998年 帝塚山学院大学教授

#### 《所属団体》

日本情報処理学会  
国際物語学会

#### 《主な受賞暦》

- 1990年 日本文化デザイン賞
- 1993年 斉藤緑雨賞

#### 《主な著書》

- 1979年 『自然学曼荼羅』 工作舎
- 1980年 『間の本』 レオ・レオーニ氏と共著 工作舎
- 1989年 『電脳都市感覚』 坂村健・石原恒和・中沢新一氏ほか共著  
NTT出版
- 1993年 『外は、良寛。』 芸術新聞社
- 1994年 『花鳥風月の科学』 淡交社
- 1995年 『空海の夢』 春秋社
- 1996年 『知の編集工学』 朝日新聞社
- 2006年 『日本という方法』 NHKブックス  
『松岡正剛千夜千冊』 求龍堂 ほか  
テレビ番組、ビデオ編集、イベント、企業戦略企画製作など多数。

このレポートは平成18年10月17日パレスホテルにおいて行われた第100回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。

松岡です。過分なご紹介にあずかりました。一言で自分の仕事とか役割とかが自分でも説明し難いようなことをしてまいりましたが、大きく言いますと編集工学という、皆様お聞き及びの少ない概念かも知れませんが、そのような領域を創りつつあります。まだ確立したとは私自身も言えないのですが、編集工学というのを最初に少しでも申し上げて、今日の演題となりました『日本という方法』についてお話ししたいと思います。

## 編集工学とは

私がやってみようと思ってここまでやって来ました編集工学というのは、工学はこちらにいらっしゃる方々の方が、大変お詳しいので説明するまでもないと思いますが、編集というのがなぜエンジニアリングの対象になるか、編集ということを一言申し上げたいと思います。エディティング、編集というのは普通は雑誌とか新聞とかテレビとか映画とか、そういうもののいわゆるポストプロダクションと呼ばれているプロセスを扱うわけですが、私が考えている編集というのは必ずしもそういう後処理のものではなくて、人間の脳が言語を使ったり、イメージを使ったり、ビジュアルリティを使ったりして組み立てているプロセスそのものをエディティングと呼んでいるわけです。

そういう意味では RNA や DNA、特に RNA がエディターシップのようなものを発揮して DNA ワールドを確立して行ったように、私たちの生命の歴史、もう少し分かりやすく言えば情報高分子の歴史と言いますか、情報の本体というのはどこかでエディティングされて来たのではないか。そのエディティングのアソシエーションや組み合わせやジェネレーションが、創造性、例えば玉虫はああいうものになる、キリンはああいうふうになる、桜はあのような花を咲かせる、猿はあのようなになる、人はこうなって来た、というのを創って来たのではないか。それ全体を、おこがましいのですが“編集”というふうに捉えているわけです。

一方、そういう情報そのものが私たちの創発性、エマージェントなものを生んだということと共に、人間としての編集行為を私たちは日々やっているのではないか。しかし、人間としての編集行為というのは、例えば今私はこんな話をしていますが、一体これはどういう編集をしてしゃべっているのか、ということが直ちに取り出せないわけです。

例えば文章を書く。あるいは映画を見る。でも、その映画を思い出そうとすると、ちゃんと映画どおりには思い出さない。非常にトポグラフィックに思い出したり、シーノグラフィックに思い出したり、あるいは女優さんのある一場面に非常にディペンドした思い出し方をする。私たちは情報編集の歴史を 10 億年とか、4 億年とか、1 億年とかかけてやって来たわりに、自分が今何をしているかというのが取り出せないのではないか、というのがもともとの私の問題意識なのです。

例えば、皆さんは昨日 1 日 15 時間ぐらい、あるいは 17 時間ぐらい起きていらっしゃったと思いますが、それを今思い出していただくとしたら。そうすると、思い出しにくいのですね。どういうふうにして行くかという、えーと、朝は何時に起きたっけ、朝食は何を食べたっけ、その時テレビを見たっけ、奥さんはどうしていたっけ、孫はどういうふうに動いたっけ、新聞は読んだっけ、新聞に何が書いてあったっけ、というふうに Q&A を立てなければいけない。

## 情報には圧縮がかかっている

そういうQを出しながら昨日1日を思い出すわけですが、とはいえ昨日1日というのは、17時間なら17時間起きていたとすると、17時間すべては思い出さないわけです。私は何度もそういう実験というほどではないのですが、いろいろなことをしましたけれども、昨日1日のことは15分かけるのも煩わしい。5分ぐらいで思い出す。となると情報というのはコンプレッションと言いますか、必ず圧縮がかかっているわけですね。つまり、入力された情報に対して、出力された情報というのは、常に編集的圧縮をかけないと再生出来ない状態になっている。

皆さんはお見かけの感じでは通勤電車とかにはもう乗っていらっしゃらないかも知れませんが、そういう場面をちょっと思い出すと、運転手が何となくハンドルを切り損ねたとかいうトピカルな所だけしか思い出せない。ではなぜ昨日1日の出来事の中でそういう編集をするのだろうか、というのが私の第二の問題意識になったわけです。

冒頭で申し上げたのは、類としての我々の生命という存在、人間にまで至った、ヒトという生命にまで至った、類としての情報編集というのがまずあるだろう。もう一つは、ヒトになってから私たちは夢を見たり活動したりしているけれども、そこにおける自分の編集というのは出来ているのだろうか、分かるのだろうか、という問題意識です。

その中で第三に、そこまでは例えばセルフエディティング、自己編集というふうと呼ぶと、私たちはコミュニケーションする生物でもありますので、相互編集、ミューチュアルエディティングということも一方でやっているわけです。誰かに言われたから対応する。「君の所は最近調子良いじゃないか」と言われて、「いや、そんなことありませんよ」「だけど株が上がっているよ」「いやいや、あれはね」といって喚起されてしまうわけです。それは自己編集とは限らない場合があるわけです。コミュニケーションの中で自分の脳の中に潜んでいる、さまざまな情報の場面で喚起されて出て来る。したがって、いつも同じ刺激によって同じ情報が出て来るとは限らないわけです。

皆さんにとって、例えばニューヨークというのはどういうものでしょうか。ニューヨークと言ってどんなことを思い出されますか、と私がお聞きしたとすると、いま私、松岡が聞いた段階で、ニューヨークと言ってパッと浮かぶものと、あさって聞かれたニューヨークとか、自分で思い出すニューヨークとか、10年前に思い出せるニューヨークとは違うわけです。そういうことってどういうものかというのを、メディア、活字とか、見出しとか、ページネーションとか、本とか、さらにIT以降はコンピューターとか、システムとか、そういうものに入れ込んで行って、出来れば自分が編集していることをのぞき込めるような仕組みを作りたい、というのが編集工学です。うまく説明出来たかどうか判りませんが、大筋の狙いです。

そのためにアーカイブというようなものを作らなければいけなかったり、先ほどご紹介にありましたが、文部科学省に頼まれて小学校の理科教育の基礎のソフトを作ったのですが、子供たちが例えば校庭なら校庭という一つの共有した場面、草が生えているとか、ポプラがそびえているとか、そういうようなものを通して学習して行く場合に、小学生たちはどういう編集をして行くと理科という世界に入って行けるか、というようなことを作った。私は文

科系か理科系か自分で分かりにくいのですが、大学は文科系になってしまったのですけれど、実は高校の理科基礎という検定教科書の監修もやらされていて、理科教育というのがどういう編集であるべきかということもずっとやって来たりもしました。

また、京都や金沢のデジタルアーカイブを作るということもしましたし、NTT の民営化後、電話開設百年記念で「情報の歴史」という、すべての情報が全部、理系も文系も政治も文学も当てはまるようなものを作って、それを IT 化したりしましたが、そういうものが編集工学というものです。

## 日本というものが前から気になっていた

そういうことをやっていると、ここからが今日の本題になりますが、日本というものが前から大変気になっていたわけです。私はもともと京都の呉服屋の生まれですので、京都の四季、着物文化、料理の文化というものと共に育って来たわけですが、長らくそういうものを無視はしていませんが看過していました。ただ、海外に行ったり、様々な国際会議でいろいろな話をしなければいけなかったり、ディスカッションをするようになりますと、どうしても日本というものが問われる。

最近でも、靖国問題や北朝鮮の問題、あるいは情報格差や格差社会の問題、日米同盟の問題、アジアにおける日本のイニシアチブの問題、すべて含めて日本が問われていて、一挙に“愛国心”というものも浮上しています。また、数日前ですか、小沢一郎のように中途半端な愛国心は危険だというような発言が出ていたり、では中途半端でないちゃんとした愛国心を持てば良いではないかと、私は一方で思ったりもしますが、そのような日本というものが私の中に段々、段々重要なテーマとして浮上して来たのです。

## 日本という国はひょっとしたら編集国家ではないか

そこでいろいろ感じたことは、ここから私の考え方になりますが、日本という国はひょっとしたら編集国家なのではないか、日本そのものが編集的な国なのではないか、ということに十数年前から気が付き始めまして、感じ始めたというのでしょうか。日本の国家や日本人、日本の社会や日本の文化というのは、どういう編集をして来たのだろうかということを考えるようになりました。

先週、それらを少しまとめまして、NHK ブックスで『日本という方法』という本にしました。これは2年前にNHKの人間講座というのを8回やりまして、そのテキストを少し膨らませただけなのですが、今日のテーマでもある『日本という方法』という言葉に私は思いを込めているんです。どういう意味かと言うと、日本の方法ではなくて、日本が選択する方法ではなくて、日本イコール方法、方法が日本だという意味です。

何かコンセプトがあり、システムがあって、そのうちオペレーショナルな方法がいろいろあって、それを今どう選択するか。もちろん国際政治の中ではそういうことをたくさんやっているし、企業の皆さんもそういうことをやられているわけですが、しかしもともといろいろ考えると、日本というものは方法国家ではないか、方法という国ではないか、という気がし

ているわけです。

そこで「情報編集国家日本」という帯をNHK側で付けてくれているわけです。「万葉から満州まで、松岡史観が疾駆する」、これはちょっと大げさですが、少し歴史を扱いながら、日本というものが編集の国であるということにだんだん自分の視点が寄って来たのです。今日は、何でそんなことを感じたのかというのを、三つほど大きな軸でお話したいと思います。

## 日本の神仏は多神多仏

一つは、日本の神仏は多神多仏である、ということがやはり大きいのではないかと思います。これは当然一神教というものと対応しているわけです。ユダヤ、キリスト教からイスラム教からみんな入るわけですが、日本列島という環境から考えても、東アジア社会の端っこであること、海に両端包まれていること、そのほか全部含めてどうしても多神多仏の国であるということは、日本という国を考えるに当たって、あるいは、日本人の思考というものを考えるに当たっても大きいのではないかと。

一神教というのは砂漠の宗教です。サハラ砂漠がヒプシサーマルによって乾燥して、モンスーンの流れが変わって、世界は一神教に後で申し上げる多神多仏の仏教とかヒンズー教を生んで来るわけですが、まず地中海方面の、いま私たちがヨーロッパとか、小アジアとか、シリアとか、中東とか呼んでいる区域は、一挙的な砂漠化が進んだわけです。

砂漠というのは、右へ行くか左へ行くかという所で、生か死がチョイスされるわけです。右へ行けばオアシスがあるかも知れないけれども、左へ行けば死が待っているかも知れない。こういうプロセスの中でジャッジメントをするに当たって、たくさんの人が、右だ、左だ、真ん中だ、後ろだ、止まれとか言っていると結論が出ないわけです。

そこでどうしても唯一絶対的なジャッジをする人が必要になる。これが一神教が生まれた背景だと思います。そこでヤーベ、エホバと呼ばれたりもしますが、ダビデ、モーセとか、そういう絶対的リーダーたちが出現して行った。これはインドアリア系の言語を根本的に作ったセム族が作り上げた宗教ではありますが、後にヨーロッパ社会全体にユダヤ、キリスト教と共に広がったわけです。

ところがモンスーンはインダスやガンジスに対しては、同じ時期に森林を作ったわけです。簡単に言えば、一神教が砂漠の宗教であるとするれば、多神多仏のヒンドゥイズム、仏教、道教、儒教は森の宗教であるわけです。森というものはどこに何があるかが分からないわけです。あっちには獣がいるかも知れないし、こっちには滝があるかも知れないし、この辺には毒蛇がいるかも知れないし、こっち側は素晴らしいキノコがいっぱい生えているかも知れない。しかも雨期というものがあって、それを待たなければいけない。そうすると森林的思考というのは熟慮、待機、そして議論、多くの意見を総合する。しかも専門家が分かれる。エンジン、タイヤ、道路、窓、ワイパー、ガソリン、別々の専門家がいるようにならないと、森では結論が出ないわけです。

もちろん獣にも詳しい、キノコにも詳しい、雨期にも詳しい、動物にも詳しい人もいるかも知れないけれども、インダス、ガンジス、アジアに生まれたモンスーン型の社会の中では、



初あるのですが、だんだん寂しくなるのですね。そして拝殿、神殿に行きますと、鏡があるのは皆さんご存じと思いますが、魂箱というのがありまして、これに何かが入っているのかというと、大体は何も入ってないのです。

魂箱は魂の箱と書く。玉手箱の魂箱ですが、こういうスピリットというのは想定されているけれども、何もありません。したがってそこは、私はそれを「うつ」、先ほどのNHKブックスの本には、「うつ」というコンセプトを非常に重視して欲しいということを書きましたが、中心がボイド、ペイカントです。そのペイカントでボイドなところに神がやって来て、帰って行く。これが日本のすべてのお祭りや式や行事や生活のスケジュールになっているわけです。

### その場に応じて主は仮に決まる

今でも毎晩こういう光景を目にします。例えば課長が部長とどこかのお座敷で一杯飲まれて、食事をされている。お座敷ですから、何となく上座というのがありますよね。課長が部長を連れて行って、どうぞどうぞ部長、あちらへと、皆さんもされたり、されて来たり、座って来られたと思います。「あ、そう」とか言って部長がそちらに座る。そこへ仮に局長がやって来る。専務がやって来る。「お、君たち、やってるね」「や、専務、いらしたんですか、どうぞどうぞ」と言って上がりかまちかなんかに座らせていると、明日から上手く行かないわけですね。「いやいや、まあ」と言って部長が「専務、どうぞどうぞ」、「いやいや、君たち、今日は僕は関係なかったんだから無礼講でやってくれ。僕はここでいいよ」と言っても、「ああ、そうですか」とはやはり言えない。「そうおっしゃらずに」と言って、部長が専務を上座に座らせるというのが日本の社会なわけですが、これは客なる神で、その場に応じて主が仮に決まるということなのです。

皆さんはいろいろなご経験をされている方々が多いので、国際的なディナーなどにも何度もお出になっていると思いますが、欧米の一神教的な家庭とか、シャトーとか、パレスとかでは、どんな場合でもホストはホストで席が決まっています。ゲストはゲストです。どんなおじさんでもホストであって、どんな大統領でもゲストはゲストです。

ところが日本はそこを変えて行くのです。いや、今日はどうぞメインになってください。明日はそうとは限りません。これを続けて行っているわけです。これを私はお伺いを立てるという意味で志向性の文化と呼んでいます。そういうものの背景には客神性、客なる神というようなものが潜んでいるのだらうと思います。これが一つです。

### 荒魂（あらたま）と和魂（にぎたま）

二つ目の問題は、最近皆さんはどういうふうにお感じになっているか、逆にお聞きしたいぐらいなのですが、和のブームというのが起こっています。私は、和のブームというのは大変問題だと思っていて、実は日本には和だけでなく荒れる、すさびと読みますが、なごみとすさびと二つあるんです。荒魂（あらたま）と和魂（にぎたま）、あるいは霊という字を書いて荒霊と和霊という場合もあります。

日本の神話で非常に図式的にお話ししますと、和魂は天照、荒魂は須佐之男です。須佐之男は弟で荒ぶる神です。私は今の日本というものが大好きだし、もっと好きになりたいし、『日本という方法』ということの本にしたりしているぐらいなので、日本というものがもっともっと面白くなって欲しいと思うし、本来の日本というものを取り戻して欲しいと思うのですが、現在の和のブームというのは半分しかやってないと思うんです。

## F1 に勝って、地球にやさしいホンダ

これは本田宗一郎さんの財団なので、少し持ち上げますと、あの荒ぶる本田宗一郎の精神というものが一方にあって、初めて和というものが成立するわけです。こんな話をこういう所ですべきかどうか分かりませんが、エピソードで一言挿まさせていただきますと、久米さんがホンダの社長をされていたころ、私は半年かほぼ1年、久米さんのお相手になぜか選ばれてお付き合いしました。

その間、トヨタもホンダもアメリカでバッシングにあって大変な問題が起こっていました。その時に全米のいろいろな会議で、ホンダもトヨタもメッセージを出さないといけない。そのメッセージがもしミスれば、さらにバッシングが続くという時期に、私も一種の戦略的な会議のようなものに引っ張り出されたのですが、その時に結論から言うと、私は「F1 に勝って地球にやさしいホンダ」と言うべきだというメッセージを出したのです。ところが久米さん以下、当時はまだ入交さんがお疲れになりながらもアメリカに残っていらっしゃったのですが、「それは無理だ。F1 は下ろさざるを得ない。そしてこの難関を切り抜ける以外はない」ということで結果、「地球にやさしい」ほうのホンダになって、私はこんなものホンダじゃないよと思っていたのです。

その後、樋口さんがアサヒビールに來られて、「松岡君、キリンに勝つ方法を考えたい」「勝てないんじゃないですか」と言ったら、「いや、勝つんだ」とおっしゃったわけですね。それで「モノは何ですか」とお聞きしたら、「スーパードライというのを今やっている、これで闘う」「それなら一つしかない」と私はお答えしたわけです。「矛盾したメッセージを出すべきだ。キリンより美味しいとか、キリンより良質であるとか、簡単に言うとキリンより日本人に合うとか、そういうことは言わない方がいい」

「合わないかも知れない。だけど勝負をかけると言ってください」これがご存じの「コクがあるのにキレがある」というコピーになった。コクとキレというのは、酒のお好きな方にとってはそんなもの一緒じゃない。コクはコクだろう。キレはキレというものだ。しかし、やはり私は日本人の最終的なパワーというか、本来は荒ぶるものと和むものの二つで、もしコクがマイルドなブレンドなものであるとすれば、キレというのは非常に激しい、荒魂である。須佐之男的なわけです。

## 荒事なき和事のみはちょっと危ない

ホンダさんは幸いにその後 F1 に復活されたので、私は喜んでいますが、私達は日本というものを考える時に、須佐之男的な荒ぶる精神、歌舞伎では荒事と言います。世話物になっ

て行くのですが、確かにこれは大事なものです。「鳴神」や「暫」や市川家が十八番にされている荒事のあのそぶり、荒唐無稽なブワーッと走り切る。

我々はディープリンパクトでその夢を託したけれども、負けました。フランスの厩舎にしてやられましたが、やはり何かそこに爆発的な暴走するものが一方にあって、和事が成立し、逆に和事が成立する中に荒事というものがなければいけないように思うのです。これが私が考えている日本という方法を編集して行くに当たって、今は誠に申し訳ないのですが、ホンダの例とアサヒビールだけの例にしましたが、この二つが組み合わさることが必要なのです。良い悪いは別として、今の日本はこういうものに差しかかっていると思うのです。

非核三原則というものを持っていながら、そういうものの中で交渉に交渉を重ねながら、例えば核の所有というものをどうやって議論したらいいのか。靖国という極めて起爆力のある潜伏した問題の大きい、私たちに寄って来る日々の本質にかかわるような難しいテーマとどうやって向合い、これからの日本というもののかじ取りをしなければいけないかを考えると、荒事なき和事みの日本で事を進めようとするのはちょっと危ないと思います。

### “負”というものを抱える編集

それは言い換えれば、私達の中に“負”というものが潜んでいるということでもあると思うのです。被爆されたとか、世界大戦で負けたとか、地震列島であるとか、火事が起こり易い長らく紙と木の国であったとか、さまざまな負というものが私達の国土にはあります。阪神大震災のようなことが起こって欲しくないけれども、起こり得る可能性がある。

そういう大きな負を抱えた日本列島の中で、日本というものの本来と将来を考えて行こうとすると、荒事、和事のような、激しいものと柔らかいものの両方を持つと共に、これが二つ目に申し上げたかったことですが、負というものを抱える編集ですね。もう少し言えば、負と正と両方抱える編集というものが大事になるだろうと思っています。

二つだけ例を出したいと思いますが、今、私達はまだいろいろなところで見ることが出来ますけれども、風呂屋の入り口に千鳥破風と呼ばれている曲線があります。西本願寺の飛雲閣から大阪の新歌舞伎座には36個そういうのが並んでいます、あれは、てりむくりと言う曲線です。建築関係の方がいらっしゃればご存じかも知れませんが、てりとむくり、そりとも読みます。

世界中の建築の曲線を見てみますと、カテナリー曲線のようにものを垂らした曲線とか、放物線とか、双曲線とか、きれいなサインカーブとか、幾何学的なきれいな曲線はたくさんあります。フィレンツェやエジプトや、いろいろなところへ行って我々は感動します。ところが、てりむくりというのは世界にないのです。韓国にも中国にもない。なぜかと言うと、プラスの正の曲線と負の曲線、これを完全に一致させているわけです。しかもこれは、NHKブックスにも書いたのですが、ここに箕甲と呼ばれる空間があって、構造がいろいろ作られているのですが、この二つの構造が作り出す結果的に世界に例のない曲線となっているわけです。

すなわち、原理的に言いますと、マイナスの曲線と正の曲線とを強引に突き合わせている。それによってふっくらした檜皮ぶきの屋根が、これは瓦でも構わないのですが、抱えられる

ようになっていて、空間的に下の線と上の線が全部合って全体としててりむくりという曲線が生まれる、ということが起こり得るわけです。

こういうことが日本の第三の方法として、先ほどの荒事や和事と共にもっと思い切ったメソッドとして必要だろう。そういうことを日本はずっとやって来たのではないかと思います。

## 日本は中心が一つではない

元に戻ってもう一度、「主」と「客」ということで例を出しますと、日本は中心が一つではないわけです。天皇と将軍が両方いるわけです。将軍がいないころ、天皇と関白・摂政がいたわけです。さらに北条氏の時は執権というのがありました。信長・秀吉時代になると太閤というのが出ました。これはトロイカ方式かということ、そうではなく、常にてりむくりとか、あるいは院政というのがあって、白河法皇のように力を持った人達もいて、常にてりむくり、いくつかの多党性、多義性と言いますか、多様性というものを維持して日本というものが進んで来たわけです。

今は議院内閣制ですが、天皇がいらっしゃる。これは非常に矛盾したことですが、結論から言うと私は矛盾でいいと思っているのですけれど、海外では天皇が元首ですが、憲法では元首ではないわけです。もしそこを突いていけば絶対に日本はおかしくなりますが、だれも天皇が元首ではないとは言えない。海外は全員元首としてみなしていますし、御璽、玉璽というものが最後はそこでサインとか、ハンコが押されます。でなければ条約は批准出来ません。しかし憲法上は象徴であって、法律的な批准の決裁権など天皇にあるとは誰も思っていないわけです。このようなことが日本にはもともとあるわけです。

## 正と負を抱え持つ装置が必要

それは、私たちの社会の中にそのようなリーダーというのが、神仏も含めて多様であったこと。それが律令制度とか近代社会になっても、なおかつ多様であったこと。例えば明治維新の場合は元老院、貴族院、枢密院というものがあつた。それが財閥解体やすべて華族が廃止された後も院外団、大野伴睦さん達とか、あの時代がそうなるのだろうと思いますが、そういうものがある。これが今どんどん、どんどん民主化されてデモクラティックになって、プレーンになっています。

それは良いのですが、果たしてそういうものだけで日本の方法がクリア出来て行くかという、絶対に日本には矛盾があるわけですから、先ほどの天皇だけでなく、噴き出るところが、靖国神社に噴き出そうになって今大変な時期に差しかかっていますが、噴き出ると解けない問題なのです。だとすると、正と負を抱え持つような装置、組み立てということを私たちはもう少し考えるべきではないかと思います。

そこで一人、私が非常に尊敬している明治の人物がいます。明治時代の人を3人ぐらい挙げろと言われると、勝海舟とこの人と徳富蘇峰の3人を挙げようかと思っている、そのうちの一人ですが、内村鑑三というキリスト者です。

ご存じのように内村鑑三は『代表的日本人』という本を英文で書きました。1900年が明

治 33 年ですから、ちょうど 20 世紀の前後のわずか数年間で 3 冊の英文の本が世界を席卷しました。1 冊は岡倉天心の『茶の本』、2 冊目は新渡戸稲造の『武士道』、そして 3 冊目が内村鑑三の『代表的日本人』（ジャパン・アンド・ジャパニーズ）です。

ここで内村鑑三は 5 人の日本人を挙げて、この 5 人の日本人こそが自分のキリスト教精神のモデルであると述べているわけです。その 5 人ですが、1 人は日蓮です。2 人目が中江藤樹、3 人目が二宮尊徳、4 人目が上杉鷹山、そして 5 人目が西郷隆盛です。読んでいただくとすぐ分かりますが、私のキリスト者のモデルはこの 5 人にあったと挙げていますが、誰もキリスト教徒ではないのです。

日蓮、中江藤樹、二宮尊徳、上杉鷹山、西郷隆盛、どちらかという陽明学者です、ほぼ全員。日蓮は違います。でも、内村はこの 5 人にキリスト教に代わる倫理があった、あるいはキリスト教に匹敵する倫理があったと言ったわけです。それを新渡戸稲造は『武士道』の中で、ベルギーの神父に、「あなたの国はいったい宗教をどうやって教えているんだ。宗教を教えなくて道徳やモラルというものはどうやって伝えるのだ。私たちには分からない」と質問しました。もちろん新渡戸は敬虔なキリスト者で、内村鑑三と共に札幌農学校を出ているわけですが、神父は「もし君が敬虔なキリスト者であるならば、宗教教育というものを考えなさい。そうしない限りあなたのキリスト教は日本では実を結ばないだろう」と。そう言われて、内村鑑三を読んで考えた末に結論を出したのが、武士道というものはキリスト教の『教え』の 8 割を持っていると言って書いたのが『武士道』という本です。

同様に内村鑑三は 5 人の日本人を非キリスト者で選びながら、その中に日本のキリスト教があるという考え方を出した。私はこのやり方が今の日本に必要なだと思うのです。IT 社会、オーケーです。デリバティブ、オーケーです。いろいろな審査機関、オーケーです。しかし、そうではないもの、つまりアメリカのスタンダードではなく、日本にかつてあったスタンダードもそれだと呼べる、そういうような解釈力とか見方というのがないと、ルールは向こうが作っているわけですから、そのままのことをやるしかない。

そうではなく、新渡戸稲造や内村鑑三のように、いや、上杉鷹山が 80%キリスト教を持っているんです。デリバティブとおっしゃるけれど、デリバティブはすでに江戸の株仲間であったんです。大阪の堂島にはあったんだと言うべきなのに、我々は全部アメリカの仕組みで「これからやります」と言うのはどうだろうか、と私は一方で思うわけです。

## 物質というものは百代の過客である

実は私は大学時代に湯川秀樹さんに私淑してしまっていて、こういうことを教えられたのです。「物理学、物質というのは百代の過客やで。宿屋があって、そこに物質が来て泊まって、泊まり終わったら去って行くんだ。まさに客神という話に近いんだが、そういうもんや」当時、湯川さんは素領域という、ご存じと思いますが大変画期的な、ノン・ローカルな「究極の場所」というものを考えられていました。

実際にはこの仮説は航空理論とか、その後のスーパースtringスとか、M 理論とかによって乗り越えられてしまったわけですが、その時に私は、素領域という考え方に非常に触発されました。宿屋である。そこに何か泊まって、百代の過客としてそこを過ぎて行く。

湯川さんはこんなことをおっしゃったのです。「君が映画館に行ったとき最初に誰もいなかったらどこに座るか。真ん中ぐらいですかね。次の人はどこに座るか。そやろ、隣には座れへんで。ちょっと空けて座るやろ。その次の人はちょっと離れたところに座るか、間に座るか。そうやって、ものは占められて物質というのは成り立っているんだ。

誰が、どこで、どのタイミングで席を占めて行くかという、物質の現象学というのが分からへんかったらあかん。そやから素粒子の中にはハンケチが畳めるぐらいのすき間があるんや、場所があるんや」ということを言われたわけです。

同様にとは言いませんが、湯川家という大変な東洋学者の一族にお生まれになったせいだと思いますが、また、短歌や和歌に非常に詳しくった湯川さんならではの物理的発想だと思いますが、このような発想というのはもちろん科学的にも面白いところがたくさんありますが、日本のメソッド、日本の思索、哲学、科学哲学の方法としても、もっと浮上すべきだと思うわけです。

同じように内村鑑三や新渡戸稲造が申し立てようとした考え方の中には、一斉に何かをしてしまうのではなくて、つまり映画館に一斉に人が入るのではなくて、一斉にITになるのではなくて、一斉にデリバティブが認められるのではなくて、徐々に徐々に席を占めながら何か構築出来る、そういうものがあっていいだろうと思えるわけです。そして、特に日本はそのようなものをもっとアピールすべき、主張すべきだろうと思います。

## これからの日本のメソッドは内村鑑三の二つのJ

内村鑑三は二つのJということを行いました。自分はどんなことがあろうとも二つのJというものの中で生き抜く日本を創りたいと言ったわけです。二つのJ、何でしょうか。一つはジーザス、一つはジャパンです。これは矛盾している。てりむくり、荒事と和事、どう言うかは別ですが、でも私は、内村が二つのJを覚悟したというのが、今の日本に足りないのではないかと思うのです。

今やスタンダード、グローバルというか、Gというのが非常に大きくなって、ナショナル、あるいはローカルなどとも言えますが、これとこれがうまく一緒にならない。このような時期を考えてみますと、改めて日本が客神の国であり、多神多仏であって、アジア的であり、そして荒事と和事があり、仮にキリスト教が日本に、それまではキリシタンは禁制でしたから、明治維新になってオーケーが出たわけで、それで立教大学も同志社大学もすべてが出来たわけですが、そのようなものの中で、しかし、ジーザスのJと、ジャパンのJの両方を抱えて行かなければいけないというふうに考えた内村に、私としてはこれからの日本のメソッドというのを感じます。

## 柔道型・相撲型

最後に、『日本という方法』の中に二つあるという具体的なたとえ話をして終わりたいと思います。私はそれを相撲型と柔道型と呼んでいるのです。

柔道は、皆さんのお年ですとよく覚えていらっしゃると思いますが、東京オリンピックに

正式種目にするために、重量制、教育的指導、効果というグローバルルールを日本自体が発信しました。もちろん柔道は日本が作ったものですから、しかし、それを作って、残念ながら神永はヘーシクに負けました。しかし柔道人口は世界中に広まって、フランスのみならずありとあらゆる国、韓国にも今日本は負けそうですけれど、そういうものになりました。これが一つの方法です。

もう一つは相撲型、これはいまだに女の人は土俵に上がりません。部屋制度で総当たり制ではありません。しかし、高見山以降、小錦を経て曙、今や朝青龍、ほとんどグローバル、外国人が占め始めています。グランドチャンピオンはモンゴル人です。

どちらがグローバルだと言えますか。柔道型と相撲型、全く逆です。私は、柔道型もちろんオーケーだと思います。だけど相撲型がもう少しあって良いように思うのです。徹底的にこだわることによって、そのこだわった世界に世界が関心を持ってチャンピオンになって行く。そして朝青龍や白鵬、私は白鵬が好きなのですが、あの何とも言えない、日本人のような体つきでしこを踏み、仕切りをする。あの男中々良いではないかと私は思っていますが、白鵬と朝青龍がやると、どこまで裏で話しているかどうか分かりませんが、ぐっと胸に熱いものがある。

あれ、一体私は何を見ているのだろうか。これは日本なのかどうか。でも、しこを踏み、東西南北が赤房、黒房、白房、青房の青龍、玄武、白虎、朱雀にあって守られて、清めの塩をまき、みそぎの水を含み、そして注連縄を、さがりを締めて相撲をとっている姿は、百パーセントジャパンなわけです。

そうだとすると、一方で柔道型をやり、もう一方で相撲型というものをもう少し考えて行くと良いのではないかと、というのが最後の私のたとえ話です。

## 稼ぎと勤めで一人前

もう一つ、実は本田財団の方と、今日どんな話をしましょうかということをしていて話に出した話がありますので、それを最後に付け加えたいと思います。

いま日本の社会では、稼ぎと勤めというのが一緒になってしまいました。しかしかつては、少なくとも明治 20 年代ぐらいまでは、もう少し分かりやすいえば江戸社会までは、稼ぎと勤めは別々だったのです。稼いで半人前、勤めて半人前です。

稼ぎというのは、お仕事です。でも、勤めというのは公共、例えばその時代であれば村で堤防が決壊するとか、火事が出るとか、出産があるとか、病人が出るとか、子供が天然痘にかかるとか言うとか、稼ぎを放っておいてでも村に戻って勤めを果たす。これがお勤めのわけです。ですから稼ぎと勤めで一人前というのが日本の一人前という意味でした。

しかし、いつの頃か私たちは、お勤めは、と聞くと、日銀です、三井です、線路を作っています、電線屋です、みたいなことを言う。それは稼ぎなのです。私たちの中にもう一度、本田財団もそうだと思いますが、勤めというものがどうやって蘇るかということがこれから、NPO だけでなく非常に重要になって来ると思います。特に日本の地域社会、国際社会の中で、日本人は何をもって勤めとするのか。稼ぎとともに勤めが見事に復活して行くことを期待しています。

本田財団はこれまで多くの顕彰者をお出しになり、優れた社会貢献活動をされていると思いますが、さらに荒事も、F1 に勝つことも忘れないで、勤めも果たしていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

このレポートは、本田財団のホームページに掲載されております。

MEMO

発 行 者 伴 俊 夫

発 行 所 **財団法人本田財団**

104-0028 東京都中央区八重洲2-6-20ホンダ八重洲ビル

Tel.03-3274-5125 Fax.03-3274-5103

<http://www.hondafoundation.jp>